

法眼

創刊号 1997年10月

西来の意を挺して

曹洞宗管長
大本山永平寺貫首
宮崎奕保

今般、「曹洞宗北アメリカ開教センター・ニューズレター」創刊のお知らせを頂き、まことに喜ばしく存じますとともに、この機会に、高祖道宣揚の第一線でご精進頂いております開教師の皆様へ、いささか微衷を申し上げたいと存じます。

本年四月、北米開教75周年の慶事を期して設立を見ました北アメリカ開教センターは、まさに宗門海外伝道の画期をなすものであります。

世界は、すでに「国際化」という国境を前提とした概念を超え、「グローバル化」と言われる時代を迎えつつあります。このとき、言葉の華やかさに惑わされず、私どもの課題として「グローバル化」を考えるならば、高祖道の普遍性とそれが具体的に現成する場所の個別性との関係に、深く思いをいたさねばなりません。

高祖様が生涯をかけて求められ伝えられた「正法」は、まさしく釈迦牟尼世尊より正伝する仏祖の大法として、時と所を超越する真理に他なりません。が、しかし、その真理が具現するのは、個々の人々においてであり、その人々が生きる歴史と社会の内側です。

世尊の大法をひたすら追慕された高祖様のご一生を顧みるとき、身命を擲ち、私心をまったく去ってのご修行の結果、そこには誰にも及び着かない、独自の境涯が開けていることに、驚嘆の念を禁じ得ません。

すなわち、普遍の真理の真摯な追求が、一つの具体的な、確かな教えとして形となるときは、際立った個性と独創性を備えているということなの

です。

個々に鑑み、私が各国で高祖道を学ばれる方々に期待してやまないのは、まずは我見を離れ、師の教えを妥協なく行じていただくこととあります。当面その教えが、日本流のやり方にすぎないとしても、高祖道が日本の風土にまず現成した事実を否定は出来ません。この事実を単純に否定せず、ここに深く学んだ者だけが、自国の風土に根付くべき高祖道をさぐりあてることができるでしょう。それは、高祖様が中国で如浄禅師様に学ばれたのと同じことなのです。

修行の真偽が国籍で決まるはずはありません。しかし、仏法、あるいは高祖道そのものという抽象物が空中に浮かんでいるはずもなく、祖師西来の意が歴史的・社会的存在としての人間に担われるものとするならば、誰を師として、何をどう学んでいくかということへの自覚の深まりがぜひとも必要でしょう。

教えが真に根付くとすれば、この自覚においてです。「グローバル化」ということが、高祖道においても実現するとすれば、それはこの自覚のもとに創造された、各国の文化における高祖道の独自性としてでしょう。

私は、このたびの北アメリカ開教センターの設立と、今後の開教師各位のご精進が、この「グローバル化」、すなわち妥協なき実践を通じての、それぞれの文化における個性的で創造的な高祖道の展開に結実することを願ってやみません。

「人々皆、道を得ることは衆縁による。人人自利なれども、今心を一つにして参究尋覓すべし」

このお示しこそ、私どもは新たな時代を前に嘯みしめるべきでしょう。

末筆ながら、開教諸師のますますのご健勝とご活躍を祈念申し上げ、ご挨拶と致します。

合掌

北米開教センター開所に望む

大本山總持寺貫首
成田芳髓

曹洞宗宗務総長
乙川良英

この度、北米開教七十五周年記念事業の一つとして、ロサンジェルスに開教センターの開所を見ることができたことは、真に喜ばしきことであり、法悦至極に感ずる。

衲もその昔、十三年間海外伝道に従事した経験があり、海外布教の容易ならざること誰よりもよく承知しておる。その任に当たる者は不惜身命の道心をもって、また和合協力し合ってはじめて僅かばかりの成果が上がるまことに地味な仕事である。

北米開教当初は、日系の信徒を中心としに布教活動を展開し、両大本山の協力の下に禅宗寺の創設を見たのだが、ここ数十年の間には、日系アメリカ人の世代も大きく変わり、日本語での布教から英語での布教が中心となっている。また、サンフランシスコ禅センターの開山故鈴木俊隆老師、ミネソタ禅センター開山故片桐大忍老師、ロサンジェルス禅センター仏真寺の故前角博雄老師等の文字どおり身命を賭し、私財を擲っての布教活動の結果、現地の人々の曹洞禅への理解が深まり、彼らの中から伝道教師が育ち、さらに彼らの下に多数の僧侶を打出するに至っておる。

現今、現地の僧侶の主宰する禅道場の中には登録されていない道場も数多くあると聞き及んでいる。このような状況を俯瞰すれば、正法の単伝が如何に困難なことか深く感ずる。

この度、開教センターの開所に当たり、奥村正博師は、語学にも堪能であり、正法眼蔵の翻訳も手がけ既に数冊に上っている、所長としてまさに適任である。

また、時を同じうして開教総監に就任した秋葉師も、時代を担う気鋭の鉄漢である。多くの難問を抱えるこの激動の時代に当たって、開教師、伝道教師の和合の下、一佛両祖の信仰と只管打坐、即心是佛の宗風の宣揚に邁進されんことを切に希うものである。

本年、北アメリカ開教センターが開所され、ここにそのニュースレターが創刊されましたことは、誠に慶ばしく、心よりお祝い申し上げます。

永い北アメリカの開教の歴史を振り返ってみると、これまでの開教を点とするならば、時代は線としてのものを求めており、今回の開教センターの設置は、これに応えるものであります。しかし一方で、こうした中心拠点となるセンターは、より以前に設けられるべきものであったともいえます。いずれに致しましても、本格的開教活動の幕開けとなっていたいただきたいと存じます。

今回開設されました開教センターは、両大本山別院禅宗寺の中の一室を専用事務所として確保し、ここに専従者を置き、恒常的開教の展開を図ることを目的に開設されたのであります。

宗門としても、来る新世紀には、この開教センターが中心となって、英語による布教活動や、開教師や伝道教師などの僧侶の育成、そして檀信徒メンバーへの教化の充実など、大きな期待を寄せておる次第であります。

願わくは、アメリカの地で、普ねく坐禅の教えが一人ひとりに届き、この開教センターが、正しく時代を見据え、地域や時代に即応した教化活動を展開されんことを、つよく希望するものであります。どうか、関係者の皆様には、この開教センターが大輪の華を咲かせる種となるよう、ともに一致協力して、ご協力いただきますようお願い申し上げます。

末筆ながら、皆様のご健勝を祈念して、ご挨拶と致します。

前宗務総長
大竹明彦

教化部長 洞外文隆

曹洞宗北アメリカ開教センターのニュースレターの創刊にあたり、ご挨拶申し上げることができ、大変に嬉しく思う次第です。

宗門の北アメリカ開教は、75周年を迎え、先日盛大なる記念法要が厳修され、さまざまな記念行事が修行されましたことはご承知のとおりであります。

この勝縁にあたり、実に多くの関係者の深いご理解とご協力を得て、北アメリカ開教の中心拠点となる機関として、ここに北アメリカ開教センターが設置されたのであります。

今、これまで永く開教に身を挺してこられた歴代開教師はじめ寺族、そして禅を強く志向されている伝道師、伝道教師のご尽力と、また檀信徒理事各位の深いご理解とご協力を惟うとき、衷心より感謝申し上げたい気持ちでいっぱいあります。

時代は、ボーダーレスの時代を経て、人々は、真実の平和と心の安寧を強く求めております。来る21世紀に、この開教センターが宗門開教の意義に鑑み、アメリカにおいて平等な社会の実現と、日米両国をはじめとする世界平和、さらに豊かな環境の保全に、おおいに貢献することを期待しております。

何卒、開教総監、開教センター所長をはじめ、各役職員が力をひとつに合わせ、全米各地の開教の中心となって、日系人社会ばかりでなく、広くアメリカ社会全体に、曹洞禅の教えが敷衍されるよう、教化事業を進められんことを念じ、ご協力申し上げることをお誓いし、ご挨拶いたします。

今年、曹洞宗北アメリカ開教センターが開設され、ニュースレターが創刊されることは大変喜ばしく、関係者各位のお力添えに感謝申し上げます。

宗門が、北アメリカ開教に着手して、本年75周年を迎えました。

当初、海外開教は、わが国より新天地を求めて北アメリカは西海岸に渡って行った人々のために、風土や民族はもちろんのことすべてが異なる異境の地にあつて、祖国を思い、祖先を偲び、母国の信仰を欲する人々への布教でありました。

現在の海外開教は、日系人社会から広くアメリカ社会に展開し、真の禅仏教、曹洞禅が芽吹きはじめ、多くの開教師や伝道教師、伝道師といった僧侶を輩出しています。そして、各地に禅センターが開設され、多くの日系人以外の人々が熱心に参禅をしておられます。

このたび、北アメリカ開教センターの開設は、禅仏教にめざめた多くの人々のために、また禅仏教がめざす平和な世界の実現と世界平和に貢献するべく、布教活動や僧侶の育成、教化の充実を計ることを使命としております。

何卒、北アメリカ開教センターの役職員、開教師・伝道教師は、その持てる力をひとつにして、この機構を充実させ、全米各地の開教の中心となって、アメリカ社会に、曹洞禅の敷衍をお願いするとともに、文化の交流、翻訳事業を通して、ご協力申し上げることをお誓いし、ご挨拶いたします。

「曹洞宗北アメリカ開教センター創立によせて」
ロスアンゼルス仏教連合会副会長
河合了勝

この度、曹洞宗北アメリカ開教75周年を期として、「曹洞宗北アメリカ開教センター」が創立されましたことは、仏教徒一同にとりましても喜ばしき快挙であると心よりお祝い申し上げます。

21世紀を目前に控え、世界は大きく変わりつつあります。

北アメリカに於いて過去1世紀近くにわたって日本からの移住民の心の糧として、辛苦を共にしてきた日本各宗派佛教も、益々進展する各人種間の混合社会化にともない、そのニーズ(必要性)に応じた開教活動へと変換を余儀なくされつつあります。

21世紀は"カオス"混沌の世紀だと予言する人もあります。人種間の混合社会化は、言語、環境、習慣、文化背景、信仰、思想等の違いから増々複雑な精神文化を生み出してくることでせう。

又更に、コンピュータ、インターネット等の進化は、世界各地のニュースを数分後に地球の隅々まで知れ渡らす多角情報時代を作り出すことでせう。

この様な期に、禅に関する人々のみならず、禅を通じて仏教に関心のある人々にも必要なる情報を提供し、又情報交換の出来る場所として、又その情報をもととして開教活動の指針を作り出す為のセンターを創立されたことは、新世紀を迎えるにあたり誠に当を得た開教方針であると敬意を表します。

曹洞宗北アメリカ開教センターの今後の発展とセンターを通じて開教活動が増々推進されますことを祈念いたします。

合掌

1997年9月吉日

北アメリカ開教総監 秋葉玄吾

この度北アメリカ開教総監部内の一機関として北アメリカ開教センターが設置されました。アメリカの曹洞禅仏教発展のため様々の活動を担っていただかなくてはなりません。

その活動の一環として「開教センターニュースレター」を発刊することになりました。その発刊を祝って、お釈迦様の2つのエピソードを紹介したいと思います。

ひとつは、禅仏教発祥の根拠とされている公案があります。お釈迦様は晩年、クシナガラ城のすぐ近くにある霊鷲山という山の頂上で、多くの弟子たちに説法を続けられました。

ある日のこと、弟子たちはお釈迦様がいつものように説法をされると思って、お釈迦様の顔をじっと見ていました。どういう訳か、この日はお釈迦様は一言も言葉を話しませんでした。そして、傍らにあった金波羅華という花を一枝取って、弟子たちの前に掲げられました。弟子たちは一体なんだろうと不審に思い黙っていました。が、その中の一人摩訶迦葉だけがそれを見てにっこりと微笑し、深く頷いたのでした。

するとお釈迦様は言いました。

「私には、正しいブツダダルマの教え(宇宙を貫く原理より導き出される生き方の教え)、生じもせず滅しもしない悟りの微妙な核心、形や姿を越えた真実の相をもつ不思議な法門(ダルマゲイト)がある。いまそれを言葉、文字に頼らず、身を持って知る体験的、根元的、生命的な真理として摩訶迦葉に伝える。」という話頭です。「無門関」という禅の語録の第6話に載っています。

お釈迦様は四十年間の間仏法(ブツダダルマ)をお説きになりました。その膨大な教えの量は八万四千の經典とも言われています。最後に一枚の花をかかげて、説法の最後の仕上げをされたものでしょうか。

「修証義」という宗典の中で、道元禅師様は下記

のような意味のことを言っておられます。

「この宇宙、この世界の中にあるすべての物、大地も草木も、垣根や家の壁、屋根瓦も路上の石さえも、真理の働きのもとに存在していることを表している。この世界の風や水や空気、光など、自然の恵みに預かって現れるものすべては、私達の知性では計り知れぬこの宇宙、大自然の摂理、仏の力に背後より資け支えられ、この世界に調和して在り、その姿そのままが悟り・真実を表している。それを無為の功德、無作の功德という」と述べられます。

この道元禅師様のお言葉を借りれば、「一枝の花」はお釈迦様が至った真理の全体であると言えます。このエピソードのお釈迦様は、「私達人間は、直接的に自分の生命全体で、その真理全体を受け取ることが実践していく、根本的な要点である。」と語っているのでしょうか。摩訶迦葉が微笑んで頷いたとき、彼の心はお釈迦様の心と一つになって受け継がれたのです。

このアメリカの地にもたくさんの摩訶迦葉が輩出してます。彼らはお釈迦様の掲げた一枝の花は何かを説き続けています。

もう一つ、お釈迦様とその弟子たちの以下のようなエピソードがあります。

「従容録」という曹洞宗門が重要視する語録の第4話にこの話が載っています。

ある時、お釈迦様は瞑想の後、弟子たちとともに散歩をしました。まわりには姿のよい樹が茂り、青々と背の低い草が生えた小さな広場に出ました。そこは静かで清らかな感じの涼しい場所でした。お釈迦様は足を止めて、この草地を指さして弟子たちに振り向いて言いました。

「誰か此処に聖なる僧院(僧が集まり修行する建物)を建てよ」

みんな不思議そうな怪訝な顔をしました。すると帝釈天が進み出て、かたわらの小さな花のついた茎の少し長い野草を手折り、草地に入りそこに野花を挿して「私は聖なる僧院を建て終わりました」

するとお釈迦様はゆるやかに慈愛の目を向け微

笑まれ言いました。

「Good」

なんとも微笑ましいお釈迦様と弟子たちのエピソードです。

ところで、漢字ではアメリカのことを「美しい国」という意味の字を用いて表現します。この美しい国、アメリカの大地に少しずつですが、かなり多くの禅仏教の「聖なる僧院」(一本の太い茎の先に花のついた野草)が建てられて、各地で花がそよ風に揺れています。それらは、まだ30～40年の浅い歴史の故か、このエピソードで示される僧伽の原点により近い規模内容であり、私にはかえって清新な魅力を感じさせてくれます。アメリカで他の禅堂を訪ねる時、私はいつも、このエピソードを思い出します。

お釈迦様が掲げられ、摩訶迦葉がにっこりと微笑された一枝の花、それは何か、お釈迦様が草地を指し、帝釈天が大地に指し挿んだ一茎草の花、それは何か、を先に歩んだ禅マスターたちは常に原点に還り怠らず点検をしました。そしてこの二つの花を融合した、茎の太い大きな花を咲かせた一本の野花を、このアメリカの各地に挿した禅マスターたちがいたのです。

日本の禅、アメリカの禅とは関わりなく、後人の私達がこの一本の野花を頭の花瓶に挿して眺めるのではなく、さらにこのアメリカの各地に挿されるよう、またしっかりとこの大地にその花を持った野草の根が張れるよう、精進を積み重ねることが後に行く者の努めであると思います。

開教センターの皆様にはこの「ニュースレター」を通し、日本、アメリカの禅に携わる人たちとともに、この「一本の野花」に肥料を加え、水を撒き、大地にその根がしっかり根付くよう、力をつくしていただくことを願います。

道元禅師は言っておられます。

「花開けば世界が香る」と。

「ニュースレター」発刊おめでとうございます。

「光を十方に輝かす」

パークレー禅センター堂頭

曹洞禅仏教徒協会会長

伝道教師 ワイツマン・メル・宗純

私は1964年にサンフランシスコのブッシュストリートにあった昔の桑港寺で、師である鈴木俊隆老師について坐禅修行を始めました。日本人の教団メンバーの皆さんは、寛大にもアメリカ人の坐禅修行者のサンガが二階の禅堂を使うことを許してくれました。

しかし、日本人メンバーとアメリカ人坐禅修行者は、お互いに誠心誠意ではありましたが二つのグループが一緒に活動をすることはありませんでした。文化的な差が大きすぎ、活動も大変違ったものでした。

60年代から70年代当時数名の日本人指導者が来米され、アメリカ人参禅者と一緒に参禅道場を始められました。それぞれの道場は指導者によって固められ独自のスタイルを発展させていきました。それら道場の参禅者どうしは、ほとんど関わり合いがなく、それらの道場と日本の曹洞宗との関わり合いもありませんでした。しかし、アメリカの僧伽でひとつ共通していたのは坐禅をするという事と、程度の差はあれ公案の勉強をするとうことでした。

我々の師匠達は、買い物をして回るような修行の仕方をよしとはせず、各々独自の環境の中で弟子たちを育て、坐禅に集中させ、道元禅師の道を学ばせるようにされました。鈴木老師は弟子達に、伝統があってしっかりと確立された日本の曹洞宗と関わりを持つ前に、自分たちの足でしっかりと立てよう自分たちの修行に十分な自信を持たせたかったのです。

80年代の中頃から各サンガのアメリカ人参禅者達は、お互いを訪問し、出会うようになり、少しずつ交流が始まりました。その結果として、全米各地からの指導者が集まる、年に一度のティーチャーズ・ミーティングが開かれるようになりました。これは、我々が共通して持っている多くの

問題について話し合う場となりました。

しかしアメリカ人は独立して行動するのが好きで、彼らは、彼らのサンガの独立性を重んじ、大組織についてまわる官僚主義を警戒します。

80年代半ば、曹洞宗宗務庁は外国人宗侶に手を差し伸べ、海外での得度と教師資格を認可する道として日本で一年おきに特別接心が開催されるようになりました。1995年カリフォルニア州グリーン・ガルチ禅センターで開催された前回の特別接心では、8名のアメリカ人僧侶が伝道教師の認可を受けました。我々は伝道教師は日本から派遣された開教師に相当するものと考えております。

我々が今直面している問題は、「開教師と伝道教師は合流して一つのグループになるべきか、それとも互いの独立性を維持するべきか」「このことが我々と日本曹洞宗との関係にどのような影響を及ぼすのか」「実際に何が一緒にできるのか」「お互いに提供できる最上のものは何か、そしてそれが我々の独立性にどのように影響するのか」等でしょう。

現在伝道教師の組織 Soto Zen Buddhist Association(SZBA 曹洞禅仏教徒協会)は宗教法人として形成されたばかりで、次の動きは正当な嗣法を受けた人を対象に潜在的な会員を結集することです。これが確立されれば、我々は一つのグループとして開教師の集まりとの関係をはっきりさせることができると思います。

我々の間にある二つの文化の極端な相違が、どんなに誤解を招きやすいかを覚えておくことが大切だと思います。我々は両者とも同じものを求めているのでしょうか？

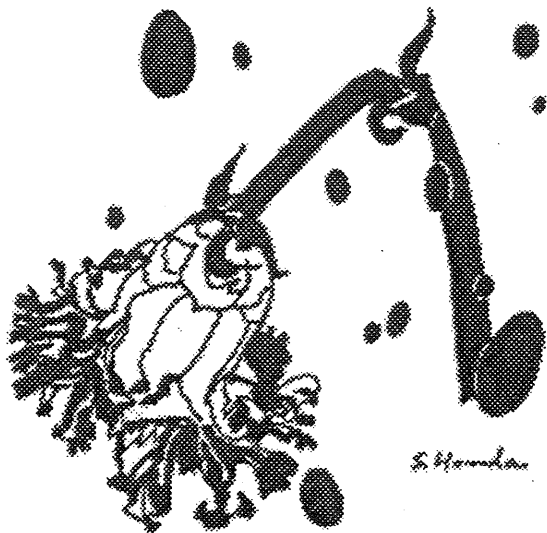
しかし、私としては、両者の相違に心をくじかれることなく、相互の理解を促進させ、そして、道元禅師の道から展開している真実の修行のための共通の地盤を見出すよう努力することは、素晴らしいチャレンジだと思います。

アメリカ禅は、一方で、日本人指導者から受け継いだ正式で伝統的な修行のなかに根づいていますが、同時に、成長し、変化しつつあります。その活力や興味が持続するかどうかは、成長するため

の十分な寛さがあるかどうかにかかっています。私の師、鈴木老師はいつも最大の尊敬を持って我々に接してくれました。老師は一人一人の仏性だけを見ておられました。何も求めていなかったのです。ですから、我々は何でも差し上げることができると感じておりました。我々は老師の指導力を疑うことが一度もありませんでしたから、老師も我々をコントロールする必要がありませんでした。

現在アメリカ文化を良く理解している若い世代の開教師さん達がいます。彼らには偏見がなく、我々の小さな成果に敬意をもち、アメリカ人修行者との協力にかなり熱心なようです。信頼関係は、21世紀にかけて共有すべき坐禅修行のあり方を創造するために、共に働くことを念願としている両サイドの人々の努力を通して、確立されていくであろうと信じております。そのために、我々は、アメリカ的なものとか日本的なものとか云う文化的差違に執着してはなりません。

お互いに胸襟を開き、率直であることによって、また、どの面にも影ができないように光を十方に輝かせることによって、我々はその信頼関係を確立できることを願っております。こうすることによって、功德は、遮られることなく両側に流れ出ることでしょう。



「夢中説夢」

開教センター所長
奥村正博

(1) アメリカの人々との私の修行経歴

私が初めて京都の安泰寺で5日間の接心を坐ったのは1969年の1月のことでした。私は20歳で駒沢大学の学生でした。日本の京都にある名も知られていない小さなお寺の小さな禅堂にたくさん外国人が坐っていたので驚きました。以来、私にとって西洋の人と一緒に坐禅修行をすることは特別なことではなく、ごく当たり前のことになりました。

私が内山老師の得度を受けたのは1970年の12月8日でした。1972年に駒沢大学を卒業し、安泰寺で修行を始めました。内山老師は、私に英語の勉強をするように勧められました。老師は海外から来る人々に英語で坐禅修行の説明ができ、日本語から英語へ坐禅のテキストを翻訳できる人を育てることが大切だと考えられたからです。私はいやとはいえ、イギリスから来られた、鈴木俊隆老師の参禅者だった人が経営していた大阪の言語センターで英語の勉強を始めました。

1975年に内山老師が引退された時、私はパイオニア・バレー禅堂と云う小さな禅道場を設立するためアメリカのマサチューセッツ州に行き、禅堂を創るため、安泰寺から来た他の二人の雲水と一緒に働き修行しました。1981年までバレー禅堂におりました。

パイオニア・バレー禅堂から日本に帰った時、内山老師からライト・トム・大通師と一緒に坐禅のテキストを、日本語から英語に翻訳するよう云われました。私達は、もとの安泰寺(1976年に安泰寺は兵庫県に移転)から近い小さなお寺で3年間一緒に働き修行しました。

1984年に私とライト・トムは、京都宗仙寺の細川祐葆老師と渡辺耕法老師(安泰寺における内山老師の後継者)の援助により京都曹洞禅センターで翻訳作業と修行を始めました。主に海外から来た人たちと一緒に修行し翻訳活動をし、曹洞

宗務庁の資金援助によって5冊の本が刊行されました。

1993年私は、片桐大忍老師が設立されたミネソタ禅メディテーション・センターにヘッド・ティーチャーとして招かれました。1996年8月まで3年間そこで修行し、同年9月三心禅コミュニティを設立致しました。1997年4月曹洞宗北アメリカ開教センターの所長に任命されました。私が二十歳のとき初めて接心を坐って以来、私は主に西洋人、特にアメリカ人参禅者の人達と一緒に修行を続けてきました。内山老師はいつも「私の誓願は、本物の坐禅修行者を育てる事と、すぐれた坐禅のテキストを作ること」と云われておりました。私は、老師の法嗣の一人として、老師の誓願を受け継いでいきたく西洋の人達と坐禅修行をし、道元禅師や内山老師の著作を翻訳してきたのです。

開教センター所長に就任を要請されたとき、私はその適任ではないと思いました。何故なら、私は坐禅しか知らないからです。曹洞宗の開教活動は、もっと幅の広いものでなければならないでしょう。私は曹洞禅の寺院や禅センターで行われている坐禅以外の活動について何も知りません。しかし、誓願のため最終的に拒否できませんでした。私は、日系アメリカ人を対象にしている曹洞宗のお寺で、開教活動をしてきた方々や、色々な禅センターや禅グループで修行をしてこられた皆様から、多くのことを学ばなければいけないと感じております。

(2) 独立と共存

私が自分の経歴について書いたのは、私の経験が70年代80年代のアメリカにおける曹洞禅サンガの一つのあり方の例であると考えからです。私は約30年の間、主にアメリカの人々と坐禅修行をしてきたのですが、日系寺院やアメリカの禅センターとの関係はほとんどありませんでした。ワイツマン・メル・宗純師が、彼の文章の中に書いているように、アメリカにおける日系人曹洞サンガと、いろいろなアメリカ人サンガ、またアメリカ人サンガどうしも、長い間、80年代前半ぐ

らいまでだと思いましたが、関わり合いがありませんでした。それぞれのグループが独立、もっと言えば孤立していたのです。アメリカに最初に来たとき、開教師としてくるのを避けました。何故なら、私達は日本の宗務庁から派遣された布教師であることを好まなかったからです。むしろ、私達は安泰寺の別院を設立するためと考えていました。私達は他のアメリカ禅センターとの関わり合いを望みませんでした。何故なら、自分たちの修行が一番本物だと思っていたからです。アメリカ人の禅センターで行われていたことは、何かいかがわしいものだと感じておりました。

80年代前半あちこちの禅センターで多くの問題がおこったのを聞いたとき、自分は正しかったと思いました。

しかしながら、80年代後半以後いろいろな禅センターに友人ができました。1984年に東京の曹洞宗宗務庁で開かれた、海外開教シンポジウムに参加して以後、私は日本の修禅寺、大乘寺、興聖寺、アメリカのグリーンガルチ禅センターで行われた、宗務庁主催の伝道教師研修所・特別接心に参加する機会を得ました。1988年から1991年まで、講義やリトリートを指導するため、いろいろな禅センターを訪問する機会を得ました。いろいろな禅センターから日本に来た人が、京都曹洞禅センターに滞在し、坐禅修行を共にし翻訳を手伝ってくれました。ミネアポリスにおりましたときは、多くの片桐老師のお弟子さんや参禅者と一緒に修行することができ、たくさんの小さな禅グループを訪問する機会を得ました。このようないろいろな系統からの人達と一緒に修行するチャンスを通していろいろなグループの多くの指導者や参禅者と知り合いました。

それらの出会いを通して、多くのことを学び、私の世界は広がっていきました。困難な状況の中で仏法を学び、坐禅修行をする多くのまじめな人達と出会ったのです。独立心は大切だと思いますが、孤立する必要はないと思います。私達がなすべきことはこちらの人々と一緒にやって行ける道を探し出すことと、仏法の参究と坐禅修行を共にしお互いの独自性を評価し尊敬できる場所を創造す

ることです。健康的な自立を抜きにして健康的な関係を持つ道はあり得ません。また、自立が孤立になってしまったら、関係を持つことは不可能です。

曹洞宗北アメリカ開教センターの任務は、それぞれの人やグループが独立し、対等かつ独自性を持ち、曹洞禅仏教の中のお互いが柔軟に学び合える環境を促進することだと私は思います。

ワイツマン・メル・宗純師が彼の文章の中で問題点を取り上げています。「開教師と伝道教師は合流して一つのグループになるべきか、それともお互いの独立性を維持するべきか」「このことが我々と日本曹洞宗との関係にどのような影響を及ぼすのか」「実際に何が一緒にできるのか」「お互いに提供できる最上のもは何か、そしてそれが我々の独立性にどのように影響するのか」。これらの問題に対する最終的な答は簡単に見つけることはできません。むしろ、早急に結論を出さない方がよいと思います。しかし、今は共に考えを話し合いお互いに理解し合う良い時期だと思います。相互の理解を抜きにして結論を出してしまうのは危険でしょう。

例えば、開教師と伝道教師は、簡単に日本人とアメリカ人と云う別れ方をしているのではありません。現在21人の開教師の内7人はアメリカ国籍、日系アメリカ人は2人、その他4人は禅センター出身で、あとの1人は、日本で得度したアメリカ人です。彼らは日本の専門僧堂で修行し、日本の宗務庁から教師資格を得ています。

13人の開教師はアメリカ人サンガで活動しています。その主な活動は伝道教師の指導する禅センターと何一つ違いはありません。日系寺院に属する開教師は7人です。

開教師が指導しているサンガは、伝道教師が指導している禅センターより、新しく小さいのです。そうしてみると、伝道教師のセンターは、アメリカにおいて歴史があり、もっと確立されていると云うことです。さらに言えば、それら開教師のサンガの次の世代は、まったく伝道教師と同じ状況になります。

また、現在アメリカ政府は、移民法の改正をしており、私たち宗教家でも永住権を取ることが

もっともっと難しくなります。将来多くの日本人指導者が、この国に開教師として来ることは困難な状況となりましょう。アメリカの曹洞禅は、もっともっとアメリカ的になり、日本の曹洞宗から独立して行くこととなるでしょう。私が推測するに、日本の曹洞宗は、アメリカの曹洞禅をコントロールすることも、支えることもできなくなるでしょう。

このような状況を考えると、私は何故この国の曹洞禅協会が、二つに分かれなければいけないのか、論理的かつ現実的な意味を見いだすことができません。将来、アメリカの曹洞禅サンガが一つの独立した存在となり、日本の曹洞禅仏教徒と対等で友好的な関係ができればと願っております。

(3)北アメリカ開教センターの任務

曹洞宗北アメリカ開教センター規程による当センターの任務は以下の通りです。

- ①北米社会における布教教化の推進。
- ②北米における宗門寺院、禅センターの資料及び情報の収集。
- ③翻訳、英語教化資料の作成。
- ④各種研修会、講演会、摂心の企画、及び実施。
- ⑤北米における寺院、禅センター、及び社会情勢の把握と、それを踏まえた教化活動の研究。
- ⑥日本からの情報の伝達、及び資料の提供。
- ⑦宗務庁出版物の紹介、及び配布。
- ⑧その他の必要な事項。
- ⑨運営委員会(ボード)、企画委員会を組織して、上記の目標を達成していく。

以上のような基本構想に基づいて行っていきたい活動は以下の通りです。

1)10月 愛知専門尼僧堂堂長・青山俊董老師による巡回布教

禅の歴史上、あまり女性指導者の話は出てきませんが、アメリカには多くの女性指導者がおり、禅における女性の役割について度々話し合われています。

禅における女性の指導力に興味のある方には大変助けになると思います。

また、アメリカ国内における数名の曹洞禅の指導者による巡回布教も企画いたしております。異なった系統のグループや地域において、講演やリトリートを指導して頂き、日本とアメリカは、さらには、アメリカ国内の違ったグループ同志の相互理解を助けることになるでしょう。

2)色々な修行道場で摂心を行います。1997年と98年には、カリフォルニア州のロサンゼルス禅宗寺、禅マウンテンセンター(陽光寺)、タサハラ、そしてミネソタ州の宝鏡寺で4回の摂心を企画致しております。日本とアメリカ両国からの参加者を僧俗問わず募集しております。摂心を一緒に行じることはお互いの理解と友好関係をより深めるのにすばらしい機会になると思います。

3)ニュースレター「曹洞禅ジャーナル」を年2回発行致します。これは日本とアメリカの曹洞禅仏教徒双方から情報を提供し、お互いの対話を催促することが出来るでしょう。

4)曹洞禅のテキストを日本語から英語に翻訳し出版致します。アメリカの曹洞禅仏教徒にとって助けとなる魅力的な曹洞禅のテキストはたくさんあります。私達の翻訳作業は学術的な物ではなく、ある程度実際的で一般的なものです。

(4)夢中説夢

20年前私が何をしたかを考えたとき、私は夢の中にいた気がします。また、私が今何をしているかは、70年代に私が考えたことからすると夢のようです。

20年後に私が何を考えているかは夢です。そして、間違いなく20年後に私が今現在何をしていたのかと思った時、夢のように感じることでしょう。私達の生活は夢の中で夢を説くようなものです。

「この夢中説夢処、これ仏祖国なり、仏祖会なり。仏国仏会、祖道祖席は、証上而証、夢中説夢なり。この道取説取にあひながら仏会にあらずとすべからず、これ仏転法輪なり。この法輪、十方

八面なるがゆゑに、大海須弥、国土諸仏現成せり。」

正法眼蔵 夢中説夢

私達が夢の話をしている時、また、夢を実現するため現実に働いている時も、私達はすでに夢の中にいるのです。私達がすべきことは、21世紀を視野に入れ、仏の法輪をこの地に転ずるよう努力を続けることだと私は信じています。

